

——古賀行義氏追悼記——

古賀行義先生のご逝去を悼む

山本多喜司

古賀先生は、昭和54年3月28日卒然として逝かれ、87年の生涯を閉じられた。先生の死は、われわれ門下生にとって大きな衝撃であるばかりでなく、先生を知るすべての人々にとって深い悲しみである。ここに謹んで哀悼の誠を捧げ、追悼のことばを述べる。

われわれ古賀先生の教え子は、先生のようなすばらしい恩師にめぐりあえたことを人生の幸と感じ、先生をわれらの誇りとしている。それは学問の上だけではなく、人間的に先生を敬愛しているからである。先生のお人柄は、高潔、枯淡、実に茫洋としてすべてのものを包容し、その広さと深さは測りしれないものがあった。先生の存在は、それ自身ほのぼのとした温かさとおちつきをわれわれに感じさせた。先生は、明治24年11月26日肥後の漢学者の家に生まれ、第五高等学校から東京帝国大学に進み、心理学と経済学を修められた。大正9年新設の名古屋高等商業学校教授となり、米国に1年、英独に1年半留学された。昭和5年広島文理科大学の教授として招かれ、久保良英先生とともに心理学教室の創設に当られた。終戦後の極めて困難な時期に広島文理科大学長事務取扱、附属図書館長などの要職にあって、原爆で灰燼に帰した大学と心理学教室の復興に貢献された。新制広島大学の発足に当っては、その創設の枢機に参画し、広島大学教授として多数の学生の教育、後進教官を指導するとともに、広島大学の基礎の確立に寄与された。昭和31年広島大学退官後は、日本大学文理学部教授、二松学舎大学教授、城西大学教授、同経済学部長・理事として勤務され、亡くなられるまで日本大学非常勤講師の職にあって私学教育の振興に貢献された。

学界においては、日本応用心理学会長(昭30～昭31)、日本心理学会長(昭31～昭32)として重責を果されたほか、日本学術會議会員、学術奨励審議会委員として学術の進歩と普及に努められた。先生の研究業績としては論

文37篇、著書ならびに翻訳書12冊、心理学書・辞典の監修8冊、3種類の知能検査の考案作成などがあげられる。先生の研究の流れを大まかに分類すると名古屋時代、広島時代、日本大学時代の3つの時期に分かれる。第1の時期は産業心理学を中心としたもので、わが国における産業心理学草創期の研究者の一人として、名古屋高等商業学校に心理学実験室を設置し、その学科課程に産業心理学を設け、産業疲労、職業指導、職業、生産工場などの論文を発表された。第2の時期には意見調査・態度測定および因子分析技法の紹介と応用を中心とする精神測定学的研究が行なわれた。わが国における因子分析のパイオニアとして先生の名を知らぬ人はない。僅かの差でその功を英國のトムソンおよびスティウンソンに譲られたが、全く単独で因子分析の一技法であるQ技法を「逆手の応用」と称して創案されたことは忘れることができない。第3の時期には日本大学を中心として乳幼児の発達的研究が行なわれた。乳幼児の行動と養育態度の研究や施設児の行動の発達と偏見矯正に関する研究が、先生をリーダーとして日大・広大の弟子たちによって全国的なになされた。その研究の一部は「MCC ベビーテスト」として公刊されている。

先生は心理学のみならず、広く漢学、文学芸術のご造詣が深く、短歌、弓道、能、謡に趣味を見出しておられた。肥後先哲についての研究も多く、壺井潔のペンネームで「日本談義」に稿を寄せておられたが「片岡朱陵とその書翰」が絶筆であろう。先生の人生にとっての最大の痛恨事は原爆で令嬢耀子さんを亡くされたことであり、その時詠まれた歌に次のものがある。

死せし子を 死なせんすべも ありしかと
古き日記を とりだしてみる。

最後に太田垣瑞一郎氏が先生の告別式でよまれた句を付け加える。

よき貌を花に埋むや春の雷

先生のご功績を偲び鎌倉に眠られる先生のご冥福をお祈りする。